

新たな関連を求めて

—ハントケの「4部作」(1)—

澤 岡 藩

「どこかで私は世界とのつながりをなくした……」ということが、たとえば『願いがまだかなえられた頃』のハントケの作品の底に流れる基調だった。しかし『本当に感じる時間』のコイシュニツヒが経験したすべてが無意味で首尾一貫性がないという感覚は、すべてが秩序づけられた世界にも意味のシステムにも個々人が服従する必要がなくなるという、いわば新たな幸福への序曲でもあった。『緩やかな帰郷』以降の作品、『サント・ヴィクトワール山の教え』『子供の物語』『村について』では、この過程が一步進められた形で描かれている。自己と世界の間、意識と現実の間、内部と外部の存在論的亀裂、不調和を癒す新しい結びつき、秩序、法則。これらの作品には、それを書き出そうとする部分が満ちている。

『緩やかな帰郷』からみるならば、Peter Pütz はこれを Zusammenhang, Form, und „Heil“ verheißende Harmonie¹⁾を見いだす試みととらえ、この小説を「意味と関連の探索」と特徴づけている。

この意味と関連の必要性は主人公の地質学者ヴァレンティン・ゾルガーについての小説の冒頭の文にすでに現れている。「ゾルガーは身近なものたちにもすでに何人か先立たれ、何かに焦がれることもなかったが、しばしばある種無私の存在的欲求、時には動物的にまでになる臉を焦がすほどの治癒への欲求を感じた。」²⁾ 治癒するために他者の介入は必要とされない。ゾルガーは結局のところ彼の一生においてほかの何者の介入もかわして生きるのだし、この点で彼

はマリアンネ（『左利きの女』）の末裔である。あの小説の最後で彼女は鉛筆と紙をとって、あらゆる対象をあらゆる細部にわたって描きながら、ときおりタッチが独自の運動を獲得するのを待っているリビングでの孤独な姿で描かれていた。ゾルガーの地質学者としての仕事もいずれみるように世界の記録と言う同様の機能を持っていて、この場合はアラスカの風景が彼自身の内部世界にも形式を与えている。

この小説のほとんど末尾に、この冒頭の文に照応するように自分に語りかける形で次の文が書かれる。「無味乾燥で、残忍な悲惨はもう君から去りつつある。君は救いを求める果てしない激しい必要で臉に油を塗られているかのように感じた。」(LH 199) 救済の油が塗られたわけではないが、少なくともその欲求を確認するこの二つの文の間で小説はゾルガーの緩やかな帰郷の始まりを描き、gesetzgebender Augenblick (LH 168) を求め経験する過程の描写を試みる。この法則（関連、あるいは形式）はすでに現象の中であって見いだされることを待っているものではない。探され作り出されなければならないものだ。(Nicht gefunden, sondern erfunden)³⁾ 個々人の想像力の働きが求められ、そこから内面世界が自ずから現れ、そこに生じる秩序感が、外界によって作られる世界の最終的イメージと対決することになる。

Der Zusammenhang ist möglich. Jeder einzelne Augenblick meines Lebens geht mit jedem anderen zusammen - Ohne Hilfsglieder. Es existiert eine unmittelbare Verbindung ; Ich muß sie nur frei phantasieren.(LH 112-3)

この考え方は4部作のほかの作品にも現れる。『サント・ヴィクトワール山の教え』には一語一句同じ表現で現れる。

In Grillparzers Armem Spielmann las ich dann : „Ich zitierte vor Begierde nach dem Zusammenhang.“ Und so kam wieder die Lust auf das Eine in Allem. Ich wußte ja : Der Zusammenhang ist möglich. Jeder einzelne Augenblick meines Lebens geht mit jedem anderen zusammen - Ohne Hilfs-

glieder. Es existiert eine unmittelbare Verbindung ; Ich muß sie nur frei phantasieren. (LSV 100)

Ein Zusammenhang ist da, nicht erklärbar, doch zu erzählen (LSV69) というのはまた別の言い回しであるが、これが『子供の物語』では、Ich arbeite an dem Geheimnis der Welt と述べられ、これはまた von niemandem auf einen Schluß zu bringender Gedanke (KG91)⁵⁾ でもあることをハントケは認めている。これらの作品に共通するものは、つまるところMartin Lütkeが存在の隠された意味 „verborgener Sinn des Daseins“ と呼ぶもので、„die stets ferne, darum für jede Projektion zugängliche Natur“ という性格を持ち、詳しくは以下のように述べられるものだ。

Das - immer ohnmächtiger werdende - Subjekt zieht sich in den vermeintlich geschützten Binnenraum seiner Innerlichkeit zurück und landet, ehe sich's versieht, in einer mal „unschuldigen“, stets „geheimnisvoll -rätselhaften“, notfalls auch fernen, immer irgendwie ursprünglich-unmittelbaren - Natur.⁶⁾

これは特に『緩やかな帰郷』と『サント・ヴィクトワール山の教え』の場合によく当てはまる性格であるが、4部作のほかの2作は、圧迫的な一般的社会の合理性に打ち勝つ道としての‘無邪気さ’と‘直截さ’を扱っている。『子供の物語』ではそれが子供の無邪気さであり、『村について』では伝統への回帰とそれとの折り合い、すなわちそこでも‘帰郷’が扱われる。

『緩やかな帰郷』の終わりの雲の中を通過しての飛行機の下降の場面は、ゾルガーのサン・フランシスコ、ロッキー山脈、ニューヨークを経由するアラスカからヨーロッパへの旅の最後の段階である。ゾルガーはほとんどのハントケの作品で私たちが出会う自己と世界の分裂に煩わされているように見える。ハン

トケはそれを „Disharmonie von Anfang an zwischen dem Ich und der Gemeinschaftswelt, den ontologischen Riß zwischen manchen Figuren und der Geschichte“ と書く。マリアンネのようにゾルガーも、この存在論的分裂を癒し架橋するために自己の内部に引きこもる。違いはマリアンネやコイシュニッヒが彼らの元々の環境（Gemeinschaftswelt）のなかにとどまるのに対してゾルガーはアラスカの冷たい違和感のある世界の中にいることだ。おそらくこの土地は『左ききの女』の“タイトルソング”のなかの in einem fremden Erdteil (LF102) と同等のものである。アラスカは、主人公に彼の生を再評価させる奇妙な土地としてまたゾルガーの冷たく寂しく喜びのない内面状態を反映するものとしての機能を持つ。

自然の風景をこのように使うことで、ハントケはゾルガーの感情を説明しそれを正当化する必要を免れた。ほかのどの作品にもまして『緩やかな帰郷』はこの疎外感と孤立を自然に与えられたもの、存在本来のものとして表現している。

ハントケが『永い別れを告げる短い手紙』、『望みのない不幸』で用いた自伝的枠組みはここではもう影を潜めている。

„Er hat seiner Isolation eine Endgültigkeit zugesprochen und sie damit faktisch fetischiert. Er stellt sie geschichtlichen Krisensituation dar“⁷⁾

ゾルガーは少なくともアラスカでは歴史の外にある。物語は空間の出来事を語ってはいるが時間の出来事は語っていない。その結果ゾルガーはこの不調和をただ自分の想像力を通じてのみ克服できるのだが、結局それが唯一の方法とならざるを得ない。なぜなら自然で存在論的な孤立はおそらく人間の活動によって克服される性質のものではないからである。

アラスカの風景とゾルガーの内面の風景の相関関係は、彼の仕事に反映している。彼はアラスカのツンドラの観察、分類、整理、すなわち形式化に携わっているわけだが、この作業はその地域を hochstepersönliche Raum (LH11) に変える。それを自己のものとして獲得することが自分自身の獲得をさらに推

進することになる。外界の大河は破壊的ではあるが、ゾルガーの形式を獲得する作業の中で次のような形で取り入れられる。durch ihre Gesetze zu einer guten Innenkraft verwandelt, stärkend und beruhigend (LH12). 内面が外界を定義しそれに意味を与える。Nicht mehr (bestimmt) das Sein das Bewußtsein, sondern das menschliche Subjekt die Erkenntnisgegenstände⁸⁾ もはや外界は脅迫的なものではなくなり、あの元ゴールキーパー、ブロッホの場合のように自己を危険にさらすものではなく、Sinn setzender Beziehungsraum⁹⁾ になる。その過程が、マリアンネの拡大した内面が自己占有するのとは逆に、世界と自己との失われた統一を再び獲得する、つまりは帰郷への過程となる。ゾルガーの空間についての研究としての自然の観察と記録が、彼にとって生きるための持続と空間の確保に役立っている。つまりはかれ自信の恣意—関連の無さ、世界との調和からはずれたと言う感覚—との戦いである。

Orientierung und lebensnotwendiger Atemraum (und damit das Selbstvertrauen) ergaben eins das andere (LH13).

やがてこの連関で子供の無邪気さは肯定的な属性となる。どのようにして子供たちが、ハントケが存在論的と規定した分裂に無縁でいられるのか、を見ることは難しいことではあるが、独特な社会的歴史的連関に対立するものとしての自然と結びついている子供の態度を養成することがいずれ確かに一つの主要なテーマとなる。

Er hatte die Umwelt in jeder geringsten Form - einer Rille im Stein, einer wechselnden Färbung im Schlamm, dem vor einer Pflanze angewehten Sand - ernst zu nehmen, wie nur ein Kind ernstnehmen kann, damit er, der kaum irgendwo Zugehörnde, sonst nirgendwo Zuständige, sich für wen auch immer zusammenhielte - Selbstüberwindung. (LH15)

ゾルガーの仕事と彼のこのあとの存在との結びつきは絶対的なものとして描かれている。

Seine Erfassung der Erdgestalt, nicht fanatisch betrieben, sondern so inständig, daß er sich selbst dabei allmählich als Eigengestalt mitfühlte, hatte indem sie ihn von der mit bloßen Launen und Stimmungen drohenden Großen Formlosigkeit abgrenzte, tatsächlich bis jetzt seine Seele gerettet. (LH15-16)

ハントケがここで用いていることば、この小説を通じて用いていることばは宗教的なものに近づき、ゾルガーの科学も宗教の一種にさえ見えてくる。それは直接他者と関連し結びついている。

Erst seine Arbeit machte ihn wieder beziehungsfähig, und wahlfähig, im zweifachen Sinn : er konnte wählen und gewählt werden. Von wem? Von wem auch immer : er wollte nur wählbar sein (LH15)

すでに小説のこの早い段階で、ゾルガーが三章で経験することになる来るべき gesetzgebender Augenblick の予兆を見て取ることができる。小説はいつものハントケのやりかたで、このすでに確立された世界内で方向と関連を失ったという感情が、das Raumgefühl (LH33) を再び獲得し、同時に自己及び帰郷したという感覚を取り戻す様子を入念に書いてゆく。次第にゾルガーの変わり続ける経験から肯定的な瞬間が結晶してくる。最初は自分を統率する感情の確認ともとれる決意の現れとなる。

Der sich immer tieferneigende Kopf bedeutete dabei nicht Selbstaufgabe, sondern Entschiedenheit : „Ich bin es, der bestimmt“ (LH69)

これはまた beseligender Wunsch nach einer Entscheidung (LH39) の満足感でもあり、ゾルガーが以前に次のようなところで直面しすでに経験していた。

Die Lust an einem spontanen Ausruf, am Ausrufen überhaupt, mit dem nicht nur die Abwesenheit von Schuld bewiesen, sondern jene strahlende Unschuld wiederhergestellt würde, mit der sich dauerhaft leben ließe. (LH38)

この無邪気さと永遠性の結合は、『子供の物語』の子供の描写の下敷きとなるものだ。

さらに世界へと接近し関連を取り戻す肯定的な瞬間は、ゾルガーのことばへの態度の中に見られる。以前、カスパーやブロッホの場合に世界と自己の間に突き刺さっていたことばは今 die Friedensstifterin : sie wirkte als der ideale Humor, der den Betrachter mit den äußeren Dingen beseelte (LH100) となる。外界とのことばを通じての新しい関係はさらに『サント・ヴィクトワール山の教え』で深められることになるが、世界との新しい関係だけでなく、その中の他者との関係も再構築される。この変化ははじめことばの重要性がほとんど意識されないまま他者への言及の中に見いだされる。ゾルガーはサン・フランシスコで彼の隣人についてこう語る。

Die Ehe war für sie zu der Form geworden, welche ihr eine kindliche Offenheit bewahrte (LH106)

しかし同時にこれはもう社会的な活動の領域だ。なぜならこの子供っぽい解放性は、in einem ungezwungenen Gemeinsinn (LH 106) に含まれているからで、私と公が収斂している。

彼の‘家’を再獲得する努力の中で、ゾルガーはますます意識と世界との関係を強めてゆく。もちろんそれは彼の仕事にとってよいことだ。

Das Bewußtsein (erzeugte) selber mit der Zeit in jeder Landschaft sich seine eigenen kleinen Räume. (LH107)

この見方はこの本の題辞にも示されている。Dann, als ich kopfüber den Pfad hinunterstolperte, war da plötzlich eine Form....こういったいわば創造上の空間 (Phantasieräume) はそれ自体ある種集合的無意識の一部とでもいえて、その中ではその都度その人ごとに新しい発見があるけれども、そこに何年も居着いたものたちには実はよく知られているものでもある。集合的でありながら個人的な風景を観察し、描写すること。それは die das Zuhause-Gefühl erzeugenden Flurzeichen der Kindheit (LH109) を追跡する試みである。アラスカを道具と洞察を用いて記述しながら、ゾルガーはかれの子供時代のヨーロッパの環境へ戻ることを決意する。緩やかな帰郷の次のステップであり、それとともにかれのヨーロッパの人間としてのアイデンティティが、歴史的な存在が取り戻される。

Und er erkannte sich in der eigenen Höflichkeit auch wieder : sie erzeugte an diesem Abend die Idee eines "Landes", die der höflich Sorger verkörperte und in deren Gestalt er sich ganz weitergab" (LH 135-6)

同時にことばの仲介で、人間世界(ハントケのことばでは Gemeinschaftswelt)との再接触が始まる。

Jeder Satz, mit dem er, den drohenden bloßen Sprachzwang beherrschend, sich an die anderen richtete, würde ihn, hielt er sich nur bei jedem Wort für (allein) verantwortlich, wieder an die Menschenwelt anstücken helfen. Mit jedem Wort, das Sorger an diesem Abend (mühselig) äußerte („langsam formen!“ dachte er), warb er zugleich um Aufnahme in das Haus, unter dessen Menschen - in sein "Land".(LH136-7)

この Land は彼の国とか特定の地域ではなく、むしろ彼の誕生の家とでもいえて、この帰郷では永久的な和解の強度に応じて調和が回復されることにな

るだろう。

Ist es vermessen, das ich Harmonie, die Synthese und die Heiterkeit will? Sind Vollkommenheit und Vollendung meine Zwangsidee? Ich erlebe es als eine Pflicht, besser zu werden : besser ich selber zu sein.(LH140-1)

それはやがて自己を変えることだけでなく、他者との共同体、共通の運命感を伴った新しい気遣いのある関係へと発展する。

Ich brauche die Gewißheit, ich selber zu sein und für andere verantwortlich zu sein (LH141)

そして gesetzgebende Augenblick、あの die Stunede der wahren Empfindung の再現ともいえる ‘時’ は、ニューヨークのコーヒーショップで訪れる。ゾルガーは、時の流れの中にいる、歴史的な主体であるという圧倒的な覚醒を経験する。彼と歴史の間に確立された結びつきは、私的な自責からの解放と個人のための積極的な潜在力を発現させる。

Es ist..... mein geschichtlicher Augenblick : ich lerne (ja, ich kann noch lernen), daß die Geschichte nicht bloß eine Aufeinanderfolge von Übeln ist, die einer wie ich nur ohnmächtig schmähen kann- sondern auch, seit jeher, eine von jedermann (auch von mir) fortsetzbare, friedensstiftende Form (LH168)

だとするとこれはゾルガーと歴史との関係が再び結びついたということよりも、むしろ別の形の結びつきが生じたと考える方がよい。歴史が、eine Aufeinanderfolge von Übeln だという認識、態度は、ゾルガーが以前から抱いているもので、またハントケが「ある人と歴史との存在論的乖離」ということばで語るときに言及していることであり、それ自体が一つのタイプの歴史との関係であり、個々人が事象に影響をあたえられないと言う無力感を感じざる

を得ない関係である。アラスカに行くことでゾルガーは歴史からはずれたということではなく、ただそれに対する特定のタイプを示したに過ぎない。ヨーロッパにもどることは、歴史の中にはいるということではなく、自分が歴史的対象ではなく、歴史的主体なのだと言っていることだ。

Ich erkläre mich verantwortlich für meine Zukunft, sehne mich nach der ewigwgn Vernunft und will nie mehr allein sein. So sei es (LH169) しかしその有効性はどのようにして保証されるのか。

ゾルガーの内部でおこる治癒の過程は、仕事や家族や金の問題で不平をこぼすエッシュのキャラクターにも移される。しかしハントケはそれをエッシュの問題に直面させるシーンに統合して描いてはいない。むしろすべては家族の神秘的な雰囲気の中に描かれる。

Sorger wünschte sich seine Macht herbei und verwandelte sich (es war schwer) in die Nische, in der sie beide saßen, wölbte sich über den Zufallsbekannten und nahm ihn, der über seinen Zustand schon erstaunt den Kopf zu schütteln begann und sich zwischendurch wieder höflich das Taschentuch borgte, in sich auf, bis sich der starre Torso des anderen allmählich neu belebte und einen zunächst grotesken, dann lebenswürdigen Kinderkopf bekam und sich schließlich die Arme rieb, aus denen, wie er sagte, eben “die Angst wegschwirrte”.(LH 173-4)

このシーンではゾルガーは慰める父親役であり、エッシュは子供、息子のようである。この関係はやがてゾルガーが彼の司祭となる宗教的領域にまで至る。

Sorger wurde sein Vorsprecher : befahl und verbot ihm (der in seiner Nach-Angst gerne gehorsam war) ; sprach ihn frei von Schmerz ; weissagte ihm Gutes und gab ihm schließlich den Segen (LH177-8)

この出会いの結果として、エッシュは彼の帰郷能力（Heimkehrfähigkeit）（LH184）を獲得してニューヨークの路上でゾルガーと別れるのである。

ホテルの部屋に戻ってゾルガーは‘正しい人間的な仕事’という観念を追い求める。彼と世界との間にある不快感、乖離の痛みを止揚してくれるような観念を。それは治癒の過程への積極的な関与と受け入れになるはずだ。彼はアラスカの風景のノートをひろげるそしてそれらの‘パターン’と一体化する。

Und bewegungslos stand er über das vielfarbige, an manchen Stellen schon altersblasse Muster gebeugt, bis er selber eine ruhige Farbe unter anderen wurde. Er blätterte die Hefte durch und sah sich in der Schrift verschwinden: in der Geschichte der Geschichten einer Geschichte von Sonne und Schnee. Jetzt könnte er alle zu sich überreden, und die dunkle Weltkugel zeigte sich als eine zu beherrschende, sogar bis ins Innerste zu entschlüsselnde Maschine. (LH 190-1)

ここまでの『緩やかな帰郷』でハントケがたどり着いた地点だといえる。このイメージとことばによる自然のとらえかた、解読のしかた、現実化、が存在論的乖離を克服し、結びつきを再構築するための手段であり、『サント・ヴィクトワール山の教え』ではスタートの地点となるはずだ。

注：

- 1) Pütz, Peter : Peter Handke. Frankfurt 1982, S.109.
- 2) Handke, Peter : Langsame Heimkehr. Frankfurt/M 1979, S.9. (以下本書からの引用は本文中にLH9のように示す。)
- 3) Pütz, Peter : a.a.O. S.111.
- 4) Handke, Peter : Die Lehre der Sainte-Victoire. (以下本書からの引用は本文中にLSV100のように示す。)

- 5) Handke, Peter : Kindergeschichte. Frankfurt. 1981 (略号KG)
- 6) Lüdke, W.Martin : 'Trübsal bläst „Des Knaben Wunderhorn“', Merkur, 34. 1980, S.995.
- 7) Durzak Manfred : Peter Handke und die deutsche Gegenwartsliteratur. Stuttgart 1982, S.150.
- 8) Pütz, Peter : a.a.O. S.111.
- 9) Pütz, Peter : a.a.O. S.109.